「ハンセン病を生きて」を読んで

3年4組　伊東裕太

この本はハンセン病を発症してしまった著者伊波敏男さんの半生と、ハンセン病という一つの病気を通して、社会のあり方や人間として大切なものを教えてくれる本です。

ハンセン病は「らい菌」によって主に皮膚や末梢神経がおかされる感染症の一つで、昔から世界中の人々を苦しめてきました。ハンセン病患者は治療薬が開発されても、まだ社会からのけ者にされ、家族と一緒に生活することも許されない、辛い歴史を背負わされたのです。患者たちはハナ九年もの間、病気と戦いながら国とも戦い、らい予防法の改正を要請し続け、ついに二〇〇一年五月十一日に裁判で勝訴したのです。当時の厚生大臣、内閣総理大臣がそろって国の罪を認め謝罪し、らい予防法は廃止され、やっと患者たちは苦しみから解放されたのです。

この本を読んで私は今まで、自分が経験し

たこともないような事実を知り、とてもショックを受けました。私は日本国憲法第十三条に、基本的人権を尊重する条文があることを勉強しました。だから、何もしなくても国民の人権は保障されていると思っていました。でもそれはただの言葉にしかすぎず、人権を守るのは国民一人一人の声なのだとわかりました。

日本のハンセン病対策は一九〇七年「らい予防ニ関スル件」から始まりましたが、一九五三年にはハンセン病の特効薬プロミンが開発されて治る病気になっていたのに、日本では「らい予防法」が新たに制定されたのです。患者からはもちろん反対運動が起きたのですが、ほとんどの国民はハンセン病について知らず無関心だったので相手にされませんでした。この時多くの国民がハンセン病を理解してくれていたら、政府を動かすこともできただろうし、状況が変わったはずなのでとても残念に思います。ハンセン病を隔離し続け、

一切の真実を国民に知らせなかった政府が悪いと思います。「差別や偏見は真実を知らないことから生まれる」と本に書いてあります。が、私も本当にそうだと思っています。今の政府もそうですが、肝心なことを国民に教えていない様に思うことが多いです。かしこい人達の集団なのに、政府の中で異議を申し立てる人が、一人もいないのが不思議です。国会議員は国民の代表なのだからもっとしっかり国民を守っていかないといけないし、反対に国民も自分の意見を言ってくれそうな人を選ぶ義務があると思いました。私は三年後に与えられる選挙権を行使するために、今から政治にも興味を持っていきたいです。また、人から聞いたことをうのみにせず、自分でちゃんと確かめるようにしたいと思います。

沖縄県で生まれた伊波さんは、中学2年生の時に、ハンセン病と診断されました。伊波さんの父は帰宅後、三線を手に取り「今おこっていることは真実なのだろうか？もしそう

なら寝覚めの夢であってほしい」という意味の歌を歌ってくれました。この時の伊波少年と父の気持ちを考えると、私はとても悲しくなりました。自分が中学2年生の病人なのに、親と離れて暮らすなんて想像も出来ないからです。翌日隔離施設に行くと、入り口で施設での名前が書いてある小さい紙が渡されます。家族に害が及ばない配慮だそうですが、自分が自分でなくなる様で胸が苦しくなりました。それでも伊波少年は病気に負けず、その後急

強をしたいと勇気を出して施設を脱走し、岡山県にある高校に入ります。伊波少年の夢を家族や自治会長、察父母が後押ししてくれたこと、高校で出会ったお医者さんが障害のある手を手術してくれたこと、大学で良い仲間にめぐり会えたこと、そして結婚して家族が出来たこと、辛い人生の中にたくさんの温かい幸せが訪れたのも、伊波少年の勇気から始まったと思います。私はいつも何かするにも、悩みあと一歩を踏み出せずにいることが多い

ので、これからは勇気を出して何にでも挑戦していきたいと思います。

この本は今まで私が読んだ本の中で一番難しかったけれど、これから生きていくための本当の勇気を教えてくれた心に残る一冊となりました。

20×20